

笠間焼の陶片 通路に再利用

リニキュアル「工芸の丘」モザイク状に

3月22日に改修工事を終え、リニキュアルオープンした陶芸や現代アートなどの体験型複合施設「笠間工芸の丘」（笠間市笠間）に、笠間焼の陶器片を活用した通路が完成した。透明の樹脂で固められた路面にはさまざまな色の陶器片がモザイク状にちりばめられ、陶芸産地の新たな取り組みを見て感じる事ができる。

（フリーライター・神野泰司、写真も）

サステナブルロードと名付けられた通路は、幅1.65メートルができていく、歩いて歩、長さ36メートル。施設の納入業者向けの通路なので、一般の人が利用できるのは一部となる。陶器片と砂利を敷き詰めた表層の厚さは2センチで、その下には5センチのアスファルト

廃棄品に新たな価値

この取り組みは笠間市の環境や脱炭素化施策の一環で、廃棄される陶器へ新たな価値



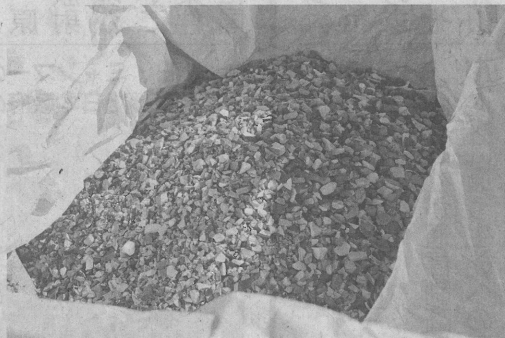
陶器片は不ぞろいのため、舗装作業は手作業で丁寧に行われる。いずれも笠間市笠間

を付けて有効活用するアップサイクルとして試験的に採用した。これまで笠間焼の再利用としては、陶芸家有志が県陶芸大学と協力。不用陶器を粉砕して粉状にし、粘土に混ぜて再び作品にすることに取組んだが、元の釉薬の影響が出て断念した経緯がある。

産地をアピール

今回、舗装施工した関東道路株式会社（筑西市）の社長、武藤正浩さん（66）は、「川砂利を使った同様の遊歩道を手掛けたことはあるが、陶器片は初の試みで苦労した」と話す。

作業の工程では、まず集め



大型粉砕機と粒度調整機で最適な大きさに碎かれた笠間焼の陶器片

た陶器を大型破砕機で粉砕し、その破片をさらに敷設に最適な大きさにそろえるため、粒度調整機にかける。

「他の陶芸産地や他社での事例も聞いたことがないし、最適な大きさが分からないので、試行錯誤の繰り返しだった」と武藤さん。自社内で実際に舗装施工して、手応えをつかんだ。話を聞きつけた同じ陶器の産地である栃木県益子町の関係者から問い合わせが来たという。

舗装施工が行われたのは3月1日。市の担当者をはじめ、武藤さんも立ち合って作業を見守った。陶器片の形が不ぞろいなため、仕上げを担当した左官職人は「一般的な粒のそろった砂利よりも慎重にこてで押さえないと陶器片が飛び出してしまう」と、作業の難しさを口にした。

一般的なアスファルト道路のように、大型機械で一気に舗装することはできないのでコストも手間もかかるが、骨材となる陶器そのものの質感が生かされるという利点もある。市では利用状況や状態の変化を観察しながら今後の可能性を検討するという。

市環境政策課の清水和晃係長は「今回の取り組みは試験的だが、笠間焼の産地としてよいアピールになる」と期待を寄せる。